

JICA活動報告:エルサルバドルから見た国際協力

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八木, 聡 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/6685 |

JICA 活動報告

- エルサルバドルから見た国際協力 -

八木 聡

(金沢大学大学院前期博士課程)



はじめに

青年海外協力隊(以下、協力隊)という言葉を知り、多くの方はどういった活動内容を思い浮かべるであろうか。イメージとしては、現地の人々と直接接しながら、村落開発をはじめとした、衣食住と直結するような活動ではないだろうか。しかし、実際には現地のニーズに合わせて、多種多様な活動が行われている。今回、私が青年海外協力隊の短期隊員として、活動を行なった考古学の職種もその一つである。一般的には協力隊と考古学とは結び付けにくいように思われるが、エルサルバドルでの活動を通して自分自身が感じた、国際協力としての考古学の役割について述べてみたい。

JICA 概要

まずは、エルサルバドルでの活動について述べる前に、簡単に JICA および日本の ODA についてまとめることで、協力隊の隊員がどのような枠組みにおいて活動を行っているのかを概観してみたい。

JICA とは「Japan International Cooperation Agency」の略称であり、正式名称は、「独立行政法人

国際協力機構」である。もともとは、「特殊法人国際協力事業団」を母体としており、2003年に独立行政法人となったことに合わせて、今の名称となった。JICAが行なう国際協力事業は、途上国の社会整備を進めるために、必要な開発計画を技術やコスト、組織・運営、環境、経済、財務評価などの面から、途上国の政府に代わって調査を行う開発調査、被援助国に対し返済の義務を課さない無償資金協力、開発途上国の若者を日本に招き、将来の国づくりを担う人材を育てる青年研修、日本が持つ災害対策の貴重な経験をいかして、世界各地における大規模災害の救援活動を行なう国際緊急援助、「専門家の派遣」「研修員の受入れ」「機材の供与」という3つの協力手段(協力ツール)を組み合わせ、一つのプロジェクトとして一定の期間に実施される技術協力プロジェクト、そして JICA の行なう事業の中で、一番知られているボランティア派遣で

ある⁽¹⁾。

さらにボランティア派遣は、大きく二つに分けられる。中南米地域の日系社会で活動する日系社会青年ボランティア及び日系社会シニアボランティア、それぞれが持っている知識・経験を活かして途上国の支援活動を行なう青年海外協力隊・シニア海外ボランティアに大きく分けられる。日系社会シニアボランティア(日経SV)とシニア海外ボランティア(SV)を例に両者の違いについて述べると、派遣形態が前者の場合、日系団体からの派遣要請であるのに対し、後者は政府間の国際約束に基づいている点で異なっている⁽²⁾。また、日系団体には日本の伝統的な文化や風習を大事にしているところもあり、隊員には模範としての言葉遣いや礼儀作法なども要求されている。

上記の活動形態の中で、今回私が参加したのは、青年海外協力隊(JOCV)の短期隊員である。現在 JICA は、協力隊事業において、82カ国、2496名の隊員(人数には、一般隊員、シニア隊員、短期緊急派遣隊員及び調整員を含む。)を派遣している⁽³⁾。職種は大きく農林水産部門、加工部門、保守操作部門、土木建築部門、保険衛生部門、教育文化部門、スポーツ部門に分けられる。その中で、考古学は教育文化部門に分類され、活動内容は調査・研究だけに留まらず、文化財の保存、国内で考古学を専攻する学生への指導、文化遺産観光・教育活動の促進についての活動も期待されている⁽⁴⁾。

では、次に上記における JICA が日本の ODA、ひいては国際協力においてどのように位置づけられているのかを見ていく(図1)⁽⁵⁾。まず、日本の国際協力は NGO「Non-Governmental Organizations(非政府組織)」などの民間組織と ODA「Official Development Assistance(政府開発援助)」に大別される。ODAとは政府あるいは、政府の実施機関によって途上国の経済・社会の発展のために行われる協力のことであり、すでに述べたように JICA は日本の ODA を支える組織の一つである。さらに ODA は三つに分けられる。一つは国連をはじめとした国際機関への出資・拠出、そして、二国間援助としてまとめられている二国間貸与と二国間贈与である。二国間援助とは先進国が直接途上国に対して有償・無償の援助を行なうことであり、この二国間援助のうち二国間贈与において無償資金協力と技術協力を担っているのが、JICA である。

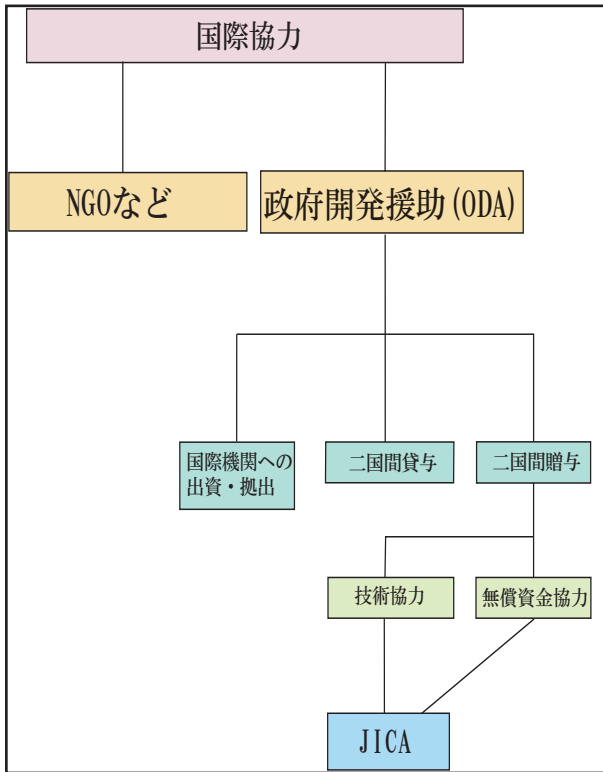


図 1.ODA の形態と分類

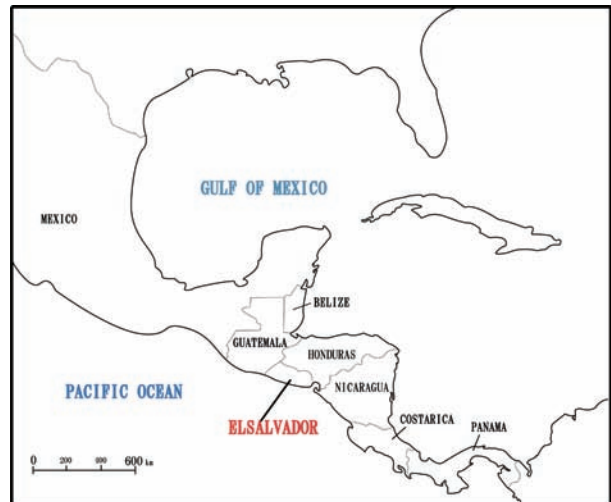


図 2. 中米略地図



図 3 エルサルバドル略地図
(ドットは、現在隊員が派遣されている都市を示す)

エルサルバドル概要

ここでは、自分が赴任したエルサルバドルについて、簡単にまとめる。エルサルバドルは、太平洋に面した小さな国で、総面積は 21040 k m² の小さな国である (図 2,3)⁽⁶⁾。グアテマラ、ホンジュラスと国境を接しており、中米諸国で唯一カリブ海に接していない国でもある。数字だけではピンとこない方も多いと思われるが、日本の四国で面積が 18803.87 k m² であることを考えると大体の大きさが、分かるのではないだろうか。公用語はスペイン語で、国民の 84% がメスティソと呼ばれる原住民と黒人の混血である。残り 16% のうち原住民が 5.6%、白人が 10%、その他 0.4% となっている⁽⁷⁾。国民の約八割が混血の方ということで、エルサルバドルはある大きな問題を抱えている。それは、メスティソの人にとって「自分たちのルーツはどこにあるのだろうか」という問題である。この問題に対して明確な答えを出すことは、今後エルサルバドルが発展していく中で、どうしても避けては通ることのできない課題といえる。なぜなら、いずれ JICA がエルサルバドルから完全に撤退し、自分たちの手で国を発展させていく時に、自分の国、あるいは自分自身を理解し、その文化に誇りを持つ気持ちが大きな原動力となっていくと、私自身考えるからである。また、宗教については

葺き屋根でできた家に住むサシガメが人体に取り付いて吸血する際に、排出した糞便の中にいる原虫トリパノソーマが人の粘膜や搔いた傷口等から体内に侵入することで、感染する病気である。貧困層の病ともされており、感染には住環境が大きく影響している。エルサルバドルでは、サンタアナ県、アウアチャパン県、ソンソナテ県を対象とし、2007 年までに対象三県におけるシャーガス病の伝搬の根絶を目標に、サシガメが生息する家屋への殺虫剤散布活動や住居改善の啓蒙活動といった活動が技術協力プログラムとして進められている。

チャルチュアパにおける協力隊活動

今回、私の派遣先は首都サンサルバドルから西に約 80 k m のところに位置するチャルチュアパという地方都市である (図 3)。ここにおいて、文化芸術審議会 (エルサルバドルにおける文化財・音楽・芸術関連の最高機関、正式名称 Consejo Nacional para la Culutura y el Arte) の管轄の下、カサブランカ遺跡公園で二ヶ月間、考古学の活動を行ってきた (図 4.5)。活動内容は、ラ・クチージャ遺跡から出土した完形土器の実測図作



図 4. カサブランカ遺跡公園

成である。ラ・クチージャ遺跡はマヤ文明の編年の中では先古典期終末期に位置づけられており、絶対年代をいえば、約 A D 200 年ころの遺跡である (図 6)⁽¹⁰⁾。平地の墓葬であり、今までピラミッドの調査が中心であったマヤの研究史の中で、きわめて大きな資料的価値を有する遺跡である⁽¹¹⁾。このように学術的に見ても価値の高い遺跡の報告書作成に、専門外の私が携わることができたことは非常に恐縮なことであると同時に光栄なことであった。また、エルサルバドルの人々も発掘調査には高い関心を寄せているようである。隊員の方の話では、発掘中に現地の人から、「お前は、おれたちの先祖の墓を調査しているんだな。」と言われたことがあるという。エルサルバドルの古代文化を担っていた人々を自分たちの先祖と考えており、自分が携わった報告書が、学術目的に留まらず、エルサルバドルに暮らす人々のアイデンティティーと大きく関わりながら利用されていくことを願ってやまない。

実測図の作成が終了した後は、カサブランカ遺跡公園内にある 5 号建造物より採取した土から、黒曜石を選別する作業を現地の作業員とともに行った (図 7-1&2)。単純作業ではあったが、炎天下の中、一日中行なったので、決して楽な作業とはいえない。黒曜石の出土状況はかなり特殊であり、切られた石彫の上部にふたをするような状況であった。そのため、出土した黒曜石を細かく見ていく必要があり、普通は捨ててしまうようなチップも含めて土ごと採取し、黒曜石の選別を行なっている。出土した黒曜石はかなりの量に上り、今現在も選別が行なわれている。おそらく選別だけで数ヶ月は掛かるかと思われる。

直接、自分の活動とは関係ないが、タスマル遺跡公園においても考古学の隊員が活動を行なっているた



図 5 仕事場風景

め、ここで紹介しておきたい。タスマル遺跡は、自分が赴任したカサブランカ遺跡公園から北へ約 1km に位置しており、すでに 1940—1950 年代にかけてアメリカ人考古学者のスタンリー・ボックスによって調査および遺跡の保存がなされ、国を代表する遺跡としてこれまで一般に公開され、親しまれてきた。ただし、保存時にピラミッドをコンクリートで固めてしまったため、現在に至るまで、ピラミッドのオリジナルの部分がどのようになっているかが分からないままであった。そこで、オリジナル部分の確認とその結果に基づいた保存作業が、JICA だけでなく名古屋大学、文化

| | | |
|---------------|--------|--|
| 1400 | 後古典期 | スペイン、アステカ王国を征服 (1521) |
| | 前古典期 | アステカ統一勢力となり征服活動をさかんにする。 |
| 1100 1000 | 古典期後期 | 金銀銅の冶金技術が南米より伝わる 北部乾燥地帯からチチメカ集団の大移動、文明地帯を侵略 |
| | | テオティワカン滅亡 |
| 700 600 | 古典期前期 | <テオティワカンによる広域支配> |
| | | テオティワカン、マヤに地方に侵入 <テオティワカンの拡大> メキシコ盆地に新大陸最大の都市テオティワカン成立 |
| 200 AD | 先古典期後期 | オルメカ文化を基礎とした地方文化圏形成 |
| | | <農耕の発達と普及> |
| 200 BC | 先古典期中期 | 定住農耕村落、土器製作の開始 |
| | | メソアメリカ地域に人類の足跡 |
| 1000 1500 | 先古典期前期 | |
| | | |
| 5000 20000 | 古拙期 | |
| | | |
| 5000 20000 | 始原期 | |
| | | |

図 6. メソアメリカ編年表

芸術審議会も共に関わりながら進められている (図 8-1&2)。

現地の人々との交流

エルサルバドルの人々は、全体的に勤勉で陽気な人々が多いように思われる。私自身の活動は直接現地の人々との交流を必要としないものであったが、遺跡公園で働く彼らを見ていると時間通りに出勤し、自分から仕事をしている姿をよく目にする。その様な仕事に対する姿勢を見ていると、国際協力を目的としてエルサルバドルに赴任した自分に何ができるのか、どうしたら、彼らは喜んでくれるのだろうかと考えさせられた。もちろん、私にできることは、自分自身の活動を最後まで全うすることである。一枚でもいい図面を描き、完成した報告書をエルサルバドルの人々のために利用してもらうことが活動を通しての私の目標であった。そんな私を彼らがどのような眼で見ているかは、実際のところ分からない。しかし、スペイン語もろくに話せない私に気さくに声をかけ、会えば明るく挨拶をしてくれる。日本に帰るときには、「次はいつ戻って

くるんだ？」と、言ってくれた。本当は、私がエルサルバドルの人々に何かをしてあげなくてはならないのに、逆に私の方が彼らに元気付けられたり、励まされたりすることが多かったように思う。最後まで、活動をやり遂げることができたのも私のような人間を受け入れてくれたエルサルバドルの人々のおかげであり、彼らと過ごした短くも貴重な時間を忘れることは無いだろう。

まとめ

今回、自分の専門外である中米において活動を行なったことで、視野が広がったように思われる。考古学だけでなくほかの職種の方々もお話をさせていただき機会があり、隊員の方々がどのような考えを持って日々の活動を行なっているのかを知ることができたこともとても貴重な体験であった。私自身が一番印象的だったことは、どの職種の隊員の方も、文化の違いや言葉の壁、自分自身の置かれている協力隊活動の枠組みの中で、どれだけのことのできるのか、ということに悩みながら、活動を続けているということである。



図 7-1. 黒曜石の選別作業



図 8-1. タスマル遺跡



図 7-2. 5号建造物



図 8-2. 修復作業風景

結局、自分がエルサルバドルの人々にできたことは微々たるものであったが、隊員の方々の生の声を聞いたことで、漠然と抱いていた協力隊に対するイメージの一步先へ進むことができたことは、今回の活動の中で、何よりも大きな収穫といえる。

また、すでに上述した部分もあるが、考古学はエルサルバドルの文化財と深く関わりながら、その活動を行なっていくため、メスティソの人々が抱えているアイデンティティーの問題を解決する糸口になりえると考ええる。ただし、この問題は一朝一夕では結果が出るようなものではないため、今まで続いてきた考古学での国際協力が、途切れることなく続いていかななくてはならない。もちろん、そのためには JICA 側の考古学に対する理解が必要となるわけであり、JICA 事務所と実際に活動を行なう現地の隊員との良好な関係が、今後とも続いていく中で、考古学の活動が行なわれていくことを切に願うばかりである。

謝辞

最後になりましたが、JICA の関係者の皆様、文化芸術審議会のアドバイザーである柴田潮音さん、考古学隊員の村野正景さん、同じく考古学隊員であり、貴重な時間を割いて発表要旨の執筆において多くの助言をいただいた市川彰さんにこの場を借りてお礼申し上げます。

註

- (1) <http://www.jica.go.jp/infosite/schemes/index.html>
- (2) http://www.jica.go.jp/activities/sv/faq/faq_01.html#01
- (3) <http://www.jica.go.jp/activities/jocv/outline/data/results/index.html>
- (4) http://www.jica.go.jp/activities/jocv/job_info/job_list/613/01.html
- (5) <http://www.jica.go.jp/firstjica/whatsjica/05.html>
- (6) 田中 高 編著『エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグアを知るための 45 章』明石書店 2004 年 pp.12-14
- (7), (8) 註 (6) を参照
- (9) http://www.jica.go.jp/evaluation/before/2003/els_01.html
- (10) 大井邦明 監修『antologia de chalchuapa 1998』京都外国語大学国際文化資料室 1998 年 p.3 を引用
- (11) 具体的な遺跡の内容に関しては、現在作成中の報告書に譲りたい。

■大会参加者（発表者を除く、再掲）

◎金沢大学文学部考古学研究室卒業生

勝保 竜哉（御殿場市教育委員会）、庄田 孝輔（石川県教育委員会）、竹部 裕介（大石組発掘調査部）、中本 寛（株式会社中本鉄工）、目黒 勝（新潟市役所）

◎金沢大学文学部考古学研究室教員

佐々木達夫、高浜秀、中村慎一

◎大学院社会環境研究科 / 人間社会環境研究科

小川 光彦、柳生 俊樹（以上、博士後期課程 3 年）

酒井 中、張 雅静（以上、博士後期課程 1 年）

後藤 崇文、矢島 智之（以上、博士前期課程 2 年）

◎文学部史学科考古学研究室

吉川 嘉久（4 年）

笠井 智仁、黒崎 裕人、小林 潤平、陶澤 真梨子、高橋 悠里、柳場 薫、平川 正、星 知美、松下 史武（以上、3 年）
赤塚 遼太、魚水 環、金子 佑佳、亀井 健太、近藤 諭、原 真緒、宮坂 美沙希（以上、2 年）



大会参加者集合写真